The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	音楽に対する懐かしさ感情の多面的側面がポジティブ感情喚起に及ぼす効果
Author(s)	石井, あゆ美
Citation	生老病死の行動科学. 2014, 17-18, p. 15-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/36360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

音楽に対する懐かしさ感情の多面的側面がポジティブ感情喚起に及ぼす効果

The relationships between multiple dimensions of nostalgia for musical pieces and positive emotion

（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）石　井　あゆ美

Abstract

Previous research has shown that musical mood, preference for musical pieces, and nostalgia for musical pieces elicit pleasant emotion. However, previous studies have used a scale on musical mood that contained items regarding nostalgia, and despite the fact that nostalgia has been described as a complex feeling, most of studies have measured nostalgia on only a single dimension. This study re-examined the factor structure of the musical mood scale and developed a scale that measures multiple dimensions of nostalgia in order to determine which of these dimensions elicits positive emotion. Forty-one undergraduate and graduate students were asked to answer a multi-dimensional nostalgia scale after listening to music that was nostalgic for their generation. They also answered three scales on the elicited positive emotion, preference for musical pieces, and musical mood. Multilevel model analysis showed that only wistfulness significantly enhanced deactivating positive emotion, even after controlling for musical mood.

Key word: nostalgia, musical mood, pleasant emotion, multilevel model analysis

Ⅰ　背景と目的

日本音楽療法学会は音楽療法について，「音楽の持つ生理的，心理的，社会的働きを用いて，心身の障害の回復，機能の維持・改善，生活の質の向上，行動の変容などに向けて，音楽を意図的，計画的に使用すること」と定義している。貫・星野（2002）によると，1995年から2000年までの６年間に発表され，『Psychological Abstracts』誌の“Music Therapy”の項目に紹介された研究論文は計166件あり，そのうち90件が結論として音楽療法の有効性を示したとされる。音楽療法の効果が認められた分野の例としては，認知症患者の妄想の解消（蒲生，2005），せん妄の軽減（澤・細見・寺西・金田・神子澤・佐竹・塚原，2009），情緒の安定や社会性の向上（渡辺，2000），および慢性期重度失語患者の言語リハビリへの有効性（山口・赤沼・佐藤・目黒，2010）などが報告されており，その効果は多岐にわたる。こうした多数の事例研究の蓄積を受け，さまざまな分野の専門家が音楽療法の有効性や，更には音楽療法が有効性を持つ上で重要となる要素を探ることを目的としたレビュー研究やメタ分析を盛んに行ってきた。しかし，音楽療法が効果を発揮するにあたって欠かせない重要な要素とは何かという点に対してはいまだ確固とした答えが出ているとは言い難い。この答えを探る上で問題とされているのが，音楽療法研究で扱われている変数の多様性である。音楽療法の実施場面では，一連のプロセスの中で働くさまざまな要素が混在することから，その中で重要な役割を果たしている要素が何であるかを見分けることが困難となっている。音

楽の持つ機能のうち，本研究では特に音楽の持つ感情調整機能に注目し，音楽がポジティブ感情を喚起させるにあたって重要となる要素について検討を行う。まず，音楽と感情喚起の関連について検討を行った先行研究の結果を概観し，扱うべき変数および検討余地の残された部分について視点を定めたのち，本研究における検討を行っていく。

谷口（1995）は，音楽を気分誘導に用いる際には音楽の持つ感情的性格を表す音楽の「感情価」を統制して研究を行う必要性があるとの主張から，音楽作品の感情価測定尺度（Affective Value Scale of Music; AVSM）を作成している。作成した尺度を用い，谷口（1995）は音楽の感情価と多面的感情状態尺度（Multiple Mood Scale; MMS: 寺崎・岸本・古賀，1992）の間にみられる関連の検討を行った。その結果，音楽の感情価と聴取者の感情状態との間には一定の関係があることが示され，特にポジティブな感情との関連としては，「親和」と非活動的快の間，および「高揚」と活動的快の間，「強さ」と活動的快の間に有意な正の相関がみられている。

一方，岩永（1999）は，音楽による感情反応には音楽の感情価によって誰でも同じ感情反応が生起するのではなく，個人の音楽に対する態度（音楽への好み）が媒介変数となって感情反応が生起することを示している（Figure 1）。

Figure 1　岩永（1999）のモデル図

音楽に対する好みに注目した研究には他に内藤（2006）がある。内藤（2006）は，音楽には「癒し」の効果があるが，音楽に含まれる要素のうち何がリラクゼーションに関係しているのか定かではないとし，音楽的要素として取り上げたテンポとメロディが与える心理的効果と，音楽に関する好みが「癒し」感情に与える影響について検証している。なお，内藤（2006）の研究において「癒し」とは，抑うつ・不安的な感情を減少させ，より沈静的な気分にさせることとされている。結果として，「癒し」に関しては，テンポとメロディによる差は認められなかったが，好みによる差は顕著に表れることが示された（Figure 2）。

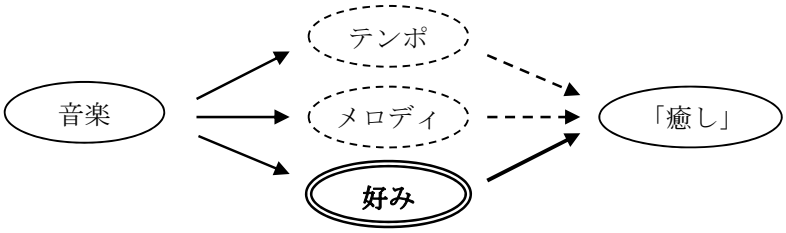

Figure 2　内藤（2006）のモデル図

こうした報告を踏まえた上で，更に小林・岩永・生和（2002）は，ポジティブ感情の喚起には，音楽に対する好みよりも，音楽に対する懐かしさ感情の方が強い影響を持つことを報告した。小林他（2002）では，ポジティブ感情として多面的感情状態尺度（寺崎他，1992）

および一般感情尺度（小川・門地・菊池・鈴木，2000）の項目から抽出した「親和感」因子と「快活感」因子を用い，音楽の感情価と音楽に対する好みおよび懐かしさ感情が，ポジティブ感情と自伝的記憶の想起量に与える影響を検討した。結果として，ポジティブ感情の高まりや自伝的記憶の想起量の増加は，音楽の感情価や音楽への好みよりも音楽に対する懐かしさ感情の影響を強く受けていることが示された（Figure 3）。ただし，小林他（2002）において「懐かしさ」項目として用いられているのは，リッカート法，7件法で回答を求めた，一般感情尺度の「懐かしい」という1項目に対する得点であった。

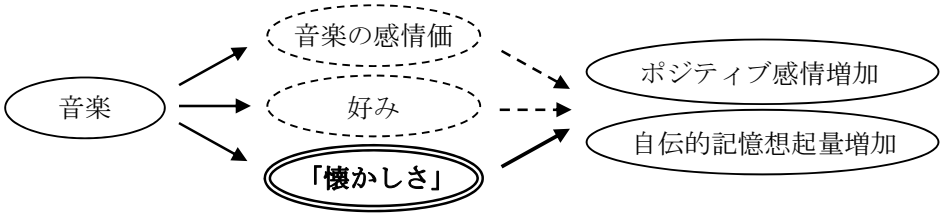

Figure 3　小林他（2002）のモデル図

このようにこれまでの研究により，音楽のリラクゼーション効果や回想法的利用について，音楽の感情価や音楽に対する好み，そして懐かしさがポジティブ感情喚起に影響するという結果が示されてきた。しかし，一方でその影響を比較する上でまだ検討の余地が残されている部分が存在することも確かである。

1点目は，音楽の感情価の評定尺度に関するものである。これまでの研究で広く用いられてきた音楽作品の感情価測定尺度（谷口，1995）には，「親和」因子のなかに「いとしい」，「恋しい」という項目が含まれていた。こうした項目は，懐かしさ感情のプロトタイプ，すなわち懐かしさ感情の中心をなす特徴について検討を行ったHepper, Ritchie, Sedikides, & Wildschut（2012）や，Nostalgic Feelings Scale（Takigawa, 2010）の中にも見受けられており，音楽作品の印象というよりもむしろ音楽作品に結びついた記憶が生起させる懐かしさ感情であると考えられる。近年，Juslin & Västfjäll（2008）は，音楽によって喚起される感情についての統合的な理論を提唱しており，その理論において音楽はさまざまなレベルのメカニズムを通して感情を喚起するとされている。そして，ある特定の感情を引き起こすことが多い音楽でも常にその感情を引き起こすとは限らないということからも推察されるように，音楽自体の持つ感情的性格が作用するメカニズムと，懐かしさ感情との関連が強い，エピソード記憶が作用するような認知的メカニズムは異なるレベルで働くとの主張がなされている。そこで本研究では，音楽の感情価がポジティブ感情喚起に与える影響と，音楽に対する懐かしさがポジティブ感情喚起に与える影響を区別して検討を行うために，懐かしさ感情に関する項目を含まない音楽の感情価評定尺度を作成することを第一の目的とした。

2点目は，懐かしさ感情の評価方法に関するものである。これまでの研究では懐かしさ感情は「懐かしい」という1項目に対するリッカート法の回答に基づいて検討されてきた。しかし，懐かしさ感情はポジティブな感情とネガティブな感情の両方を含む複雑な感情であることが指摘されている（Wildschut, Sedikides, Arndt, & Routledge, 2006）。例えばHolak, & Havlena（1998）は，懐かしさ感情の感情的な構成要素について検討を行っている。調査

では20代から70代の参加者に，自身の「懐かしい」経験についてできるだけ詳しく記述するよう求め，得られた記述に対して内容分析を行った。結果として，懐かしさ感情には，楽しい，心地よい記憶に加え，もう過去には戻れないという喪失の感覚が伴われることが示された。また，Hepper et al.（2012）は，懐かしさ感情のプロトタイプ，すなわち懐かしさ感情の中心をなす特徴について調査を行っている。懐かしさを特徴づけるものについての自由記述をもとに得た35のカテゴリの一部として，懐かしさは，幸せに感じながらも，「もう過ぎ去ったことだ」という感覚も伴われる複雑な感情であることが示されている。更に嶌田（1997）も，なつかしさを構成する感情についての検討を行っており，なつかしさが快感情や自伝的記憶を反映する複合的な感情であることを示している。こうした結果が示すように，懐かしさ感情は，単一の側面では捉えることが困難である，複雑な感情である。そのため，音楽に対する懐かしさ感情がポジティブ感情喚起に与える影響に関してより詳細な検討を行うためには，懐かしさを多面的に捉える尺度を用いて検討を行う必要があると考えられる。そこで本研究では，音楽に対する懐かしさ感情がポジティブ感情喚起に与える影響に関してより詳細な検討を行うために，音楽に対する懐かしさ感情を多面的に評定する尺度を作成することを第二の目的とした。本研究で参照したのは，懐かしさに関連する形容語について主成分分析を行った嶌田（1997）の研究である。この懐かしさの構成感情（嶌田，1997）の項目をベースに，音楽作品の感情価測定尺度に含まれていた「いとしい」，「恋しい」という項目を加え，その因子構造について検討を行うことにより，音楽に対する懐かしさ感情を多面的に評定する尺度を作成することを目指した。

また，本研究で検討を行うのは，音楽が喚起させるポジティブ感情についてであるが，感情は基本構造として，少なくとも快と覚醒（活性）の 2 軸を持つことが研究者の間でほぼ一致している（町田，2010）。音楽が喚起させるポジティブ感情を検討する際には，沈んだ気分を活性化させるという快・高覚醒と，落ち着かない気分を落ち着けるという快・低覚醒の 2 種類を想定して検討することが妥当だと考えられる。そこで本研究では，ポジティブ感情を高覚醒と低覚醒に区別して質問項目を構成している多面的感情状態尺度・短縮版（寺崎・古賀・岸本，1991）の下位因子のうち，非活動的快および活動的快を従属変数として用い，感情喚起への影響の検討を行った。

Juslin & Västfjäll（2008）が提唱する，音楽による感情喚起に関して想定されるメカニズムのうち，本研究で検討を行うメカニズムには 2 つのレベルが存在する。1 つは音楽そのものが持つ成分が直接人の感情に影響するという，低次なレベルであり，もう 1 つは音楽そのものが持つ成分が記憶と結びついて，人の感情に影響するという，高次なレベルである。前者のメカニズムに関係してくるのは音楽自体の印象，すなわち感情価であり，後者のメカニズムに関係してくるのは音楽に対する懐かしさ感情と音楽に対する好みである。更に，前者のメカニズムに関係する音楽の感情価は曲自体に帰属する要因であり，曲が持つ感情価のグループごとに感情喚起に対する影響が異なってくる。一方，後者のメカニズムに関係してくる懐かしさ感情と好みは個人に帰属する要因であり，個人の持つ経験によって感情喚起に対する影響が異なってくる。音楽による感情喚起に関してこれまで行われてきた研究では，音楽の感情価グループの効果と個人の持つ経験の効果はそれぞれ個別に検討されていた。しかし，音楽の感情価グループの効果は，個人の経験に依らずマクロレベルで作用するものである一方，個人の持つ経験の効果は，同一の音楽に対し個人ごとにミクロレベルで作用して

くるものであり，両者には階層性の違いが想定される。このように階層性のあるデータを用いて各要因の影響を検討する場合に有効な分析方法として近年注目されているのが，マルチレベル分析である。マルチレベル分析では個人レベルの要因と集団レベルの要因の影響力を区別してその大きさを推定するため，マルチレベル分析を行うことで，個人レベルの知見だけで集団レベルの要因を考慮せず個人レベルを推論するという錯誤を避けることができるという利点がある（上野，2011）。本研究では，音楽の感情的性格が感情喚起に及ぼすマクロレベルの効果と，同じ音楽を聴取した際でも各人の持つ経験によって感情喚起の様相が異なるという，音楽に対する懐かしさ感情および好みが感情喚起に及ぼすミクロレベルの効果の２つを切り離して同時に検討するため，マルチレベル分析を用いた検討を行った。

以上述べた点を踏まえ本研究では，音楽の感情価と，音楽に対する懐かしさ感情および好みが，感情喚起に対して異なるレベルで作用することを前提とした上で，１）音楽の感情価測定尺度（谷口，1995）の下位尺度の「親和」から懐かしさ感情に関連する項目を除外して因子構造を再検討すること，２）音楽に対する懐かしさの構成感情（嶌田，1997）の項目をベースに，懐かしさを多面的に捉える尺度を作成すること，３）作成した尺度を用い，２段抽出モデルによるマルチレベル分析を行うことにより，集団レベルの要因である，曲の感情価の影響を考慮した上で，個人レベルの要因である，音楽に対する懐かしさの多面的側面と音楽に対する好みが，ポジティブ感情喚起に及ぼす影響を検討すること，以上３点を目的として調査を行った。

Ⅱ　方法

１．予備調査

本実験において呈示する刺激音楽曲を選出するために，質問紙調査を行った。音楽曲の選定基準は，第一に，本実験の対象となる大学生および大学院生が「懐かしい」と感じることであり，第二に，音楽作品の感情価測定尺度（谷口，1995）に示される６つの感情価を特徴的に持つことであった。

1-1．参加者

大学生および大学院生64名（男性30名，女性34名）が参加した。参加者の年齢幅は19歳から27歳であり，平均年齢は22.1歳（*SD*=1.5）であった。

1-2．手続き

質問紙は個人ごとに配布し，参加者に各自回答を求め，書き終え次第回収した。質問紙では，音楽作品の感情価測定尺度（谷口，1995）の因子名や項目内容を参考にした形容語を用いて，懐かしさを喚起し，かつ６つの感情価を特徴的に持つと感じる音楽曲を，各感情価につき１曲以上回答させた。なお，質問紙に使用する形容語の表現としては，音楽の発想記号として用いられる形容表現（例えば，dolce；柔らかく，maestoso；荘重に，など）を参照し，音楽の評定にふさわしい形容語を選択した。質問紙に用いた形容語は次の通りであった。なお，カッコ内に示したのは，回答者の理解を促すために併記した下位項目である。１）高揚感のある（陽気な，うれしい，楽しい，明るい），２）陰りのある（沈んだ，哀れな，悲しい，暗い），３）柔らかい（優しい，おだやかな，繊細な，優雅な，静かな），４）

力強い（強い，猛烈な，刺激的な，断固とした），5）軽快な（気まぐれな，浮かれた，軽い，落ち着きのない），6）荘重な（厳粛な，おごそかな，嵩高な，気高い），以上6つの形容語を用いて回答を求めた。質問紙への回答時間は約10分であった。

1-3．結果

延べ647の回答から486曲についての回答が得られ，刺激音楽曲の候補とした。その後得票数を感情価ごとに合計し，得票数の多い順に1感情価あたり2曲，計12曲を本実験で用いる刺激音楽曲とした。なお，1つの感情価内での得票数が同数となった場合には，全体での得票数の多い順に選出した。Table 1に音楽曲の詳細を示した。

Table 1　選定された刺激音楽曲の詳細

感情価カテゴリ	音楽曲タイトル	アーティスト名
高揚感のある	LOVEマシーン	モーニング娘。
	勇気100%	光GENJI
陰りのある	交響曲第6番ロ短調『悲愴』より第4楽章	Tchaikovsky, P. I.
	ドナドナ	
柔らかい	ふるさと	
	カノン	Pachelbel, J.
力強い	ULTRA SOUL	B'z
	ボレロ	Ravel, J. M.
軽快な	勝手にシンドバット	サザンオールスターズ
	学園天国	フィンガー5
荘重な	大地讃頌	
	君が代	

2．本調査

2-1．参加者

大学生および大学院生41名（男性14名，女性27名）が参加した。参加者の年齢幅は20歳から25歳であり，平均年齢は22.0歳（*SD*=1.0）であった。

2-2．実験装置

刺激音楽曲の呈示にはノート型パーソナルコンピュータ（XPS M1330, DELL）を用い，スピーカー再生を行った。

2-3．刺激材料

呈示した音楽刺激は，音楽曲とノイズからなった。音楽曲には，予備調査によって選出された12曲を用いた。各刺激音楽曲は，開始後4分間でフェードアウトするように編集を行った。1種類の音楽曲が4分に満たない場合は，違和感のないように繰り返し再生を行い，4分間連続して流れるように編集した。ノイズにはホワイトノイズを用いた。呈示した音楽刺激に関しては，4分間音楽曲が再生された後，5秒間のブランクを挟み，15秒間ホワ

イトノイズの再生を経て，自動的に次の音楽曲に移るよう編集を行った。呈示する音楽刺激の編集作業には，Windowsムービーメーカーを用いた。

2-4．手続き

本調査は2011年12月に関西圏の大学構内の教室で行った。調査は１名から９名の，個人または集団で行った。まず，参加者に対し実験条件についての教示を行った後，安静状態で各音楽曲を聴取させた。音楽曲の評定に際しては，曲開始後１分間は評定を行わず，呈示される音楽曲の聴取に集中するよう教示した。また，この曲開始後１分間の聴取期には，閉眼状態を保つか前方を見るなどして，評定用紙を見ないよう求めた。呈示刺激は１分間の聴取期と３分間の評定期，５秒間の空白期と15秒間の切替期からなった（Figure 4）。評定期の開始時には，実験者が「評定を始めてください」と参加者に声を掛け，音楽が喚起させる感情についての評定および音楽の印象について評定を求めた。１つの音楽曲に対する評定は，音楽曲が消えていくまでの３分間で完了させた。その後，前に呈示した曲の印象を取り除いてから次の曲の聴取に移るために，５秒間のブランクをはさんだ後に，15秒間のホワイトノイズを聴取させた。聴取期から切替期までを１曲分のセッションとし，１人あたり全部で12曲に対して評定を求めた。なお，曲の呈示順はカウンターバランスをとった。本実験の実施時間は約60分であった。

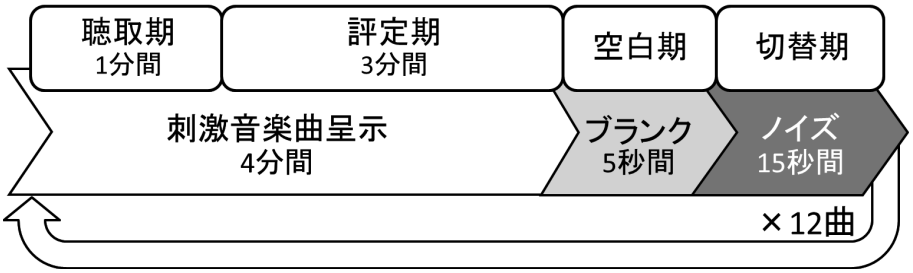

Figure 4　音楽曲評定の流れ

2-5．質問紙

測定項目は，音楽の印象評定，音楽に対する懐かしさの評定，音楽に対する好みの評定，および参加者自身の感情状態評定に関する項目からなった。以下に各項目の詳細について述べる。

音楽の印象評定　各音楽曲の持つ感情価を測定する尺度として，音楽の感情価測定尺度（谷口，1995）を用いた。ただし，「親和」因子に含まれる「いとしい」，「恋しい」の２項目は，音楽自体の感情価というよりも音楽が喚起する懐かしさ感情を示す項目であると考えられたため，この２項目を除外した。その上で，次に因子負荷量が高く，かつ音楽が喚起する懐かしさ感情を示す項目ではないと考えられた，「繊細な」および「優雅な」の２項目を加え，測定尺度として用いた。用いた因子と項目はそれぞれ，「高揚」（陽気な，うれしい，楽しい，明るい），「抑鬱」（沈んだ，哀れな，悲しい，暗い），「親和」（優しい，おだやかな，繊細な，優雅な），「強さ」（強い，猛烈な，刺激的な，断固とした），「軽さ」（気まぐれな，浮かれた，軽い，落ち着きのない），「荘重」（厳粛な，おごそかな，崇高な，気高い）

の６因子計24項目であった。中村（1983）の教示を参考とし，「音楽の特徴（性格）をことばで表現するとしたら，次の形容語のそれぞれがどの程度当てはまるか評価してください」の教示に対して，「１＝全く当てはまらない」から「７＝よく当てはまる」までの７件法で回答を求めた。

音楽に対する懐かしさの評定　各音楽曲に対する懐かしさ感情の程度を測定するため，懐かしさの構成感情（嶌田，1997）より，「親しみ」，「やさしさ」，「せつなさ」，「おかしさ」，「新鮮さ」の５因子12項目（親しみのある，心がひかれる，なじみがある，たのしい，うれしい，ここちよい，ほのぼのとした，しみじみとした，せつない，古くさい，照れ臭い，おかしい）と，音楽作品の感情価測定尺度（谷口，1995）のうち，懐かしさに関連すると考えられた２項目（いとしい，恋しい）の計14項目から構成された尺度を用いた。中村（1983）の教示を参考とし，「音楽を聴いて，どんな気分になったか，どんな感情が生じたかを評価してください」の教示に対して，「１＝全くしない」から「７＝とてもする」までの７件法で回答を求めた。

音楽に対する好みの評定　各音楽曲に対する個人の好みの程度を測定するため，「この音楽は好きですか」の教示に対して，「１＝嫌い」から「７＝好き」までの７件法で回答を求めた。

参加者自身の感情状態評定　各音楽曲の聴取に伴って喚起されたポジティブ感情の程度を測定するため，多面的感情状態尺度・短縮版（寺崎他，1991）の下位因子のうち，非活動的快および活動的快を用いた。「非活動的快」は，のんびりした，おっとりした，ゆっくりした，のどかな，のんきな，の５項目から構成された。「活動的快」は，活気のある，気力に満ちた，元気いっぱいの，はつらつとした，陽気な，の５項目から構成された。中村（1983）の教示を参考とし，「音楽を聴いて，どんな気分になったか，どんな感情が生じたかを評価してください」の教示に対して，「１＝全く感じていない」から「７＝はっきり感じている」までの７件法で回答を求めた。

2-6．倫理的配慮

本研究は，大阪大学大学院人間科学研究科行動学系研究倫理審査委員会の許可（受付番号；23070）を得て実施した。参加者には，研究の目的や，得られたデータに関しては統計的に処理され，個人のプライバシーが保障されること，また実験への参加は強制ではないことについて口頭と文書で十分に説明を行い，同意を得た上で実験を実施した。

Ⅲ　結果

１．音楽評価尺度の因子分析

1-1．音楽作品の感情価測定尺度（懐かしさ感情除外）の因子分析

各項目の評定値の偏りを確認したところ，極度の偏りはみられないことが確認されたため，測定したすべての項目を以下の分析に用いた。まず，音楽作品の感情価測定尺度（谷口，1995）の24項目の評定値について探索的因子分析（最尤法・直接オブリミン回転）を行った。分析に際しては，「親和」因子項目のうち「いとしい」，「恋しい」の２項目は懐かしさ感情に関連すると考えられたため除外し，その次に「親和」因子への因子負荷量が高く，かつ，懐かしさ感情には関連しないと考えられた「繊細な」，「優雅な」の２項目を加

Table 2　懐かしさ感情を除外した音楽作品の感情価測定尺度の因子分析パターン行列

形容語	因子負荷量						共通性
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	
＜第1因子：軽快さ＞（α＝.95）							
気まぐれな	.90						.78
軽い	.74						.88
浮かれた	.73						.92
落ち着きのない	.73						.80
＜第2因子：陰り＞（α＝.95）							
沈んだ		-.94					.93
暗い		-.88					.90
悲しい		-.84					.83
哀れな		-.74					.75
＜第3因子：力強さ＞（α＝.82）							
強い			.73				.53
猛烈な			.71				.75
刺激的な			.56				.78
＜第4因子：柔らかさ＞（α＝.86）							
優しい				.73			.70
おだやかな				.64			.71
*優雅な				.51	.39		.74
*繊細な				.50			.60
＜第5因子：荘重＞（α＝.77）							
厳粛な					.95		.95
おごそかな					.86		.93
崇高な					.61		.79
＜第6因子：高揚感＞（α＝.96）							
楽しい						-.90	.96
うれしい						-.85	.80
陽気な						-.79	.93
明るい						-.68	.88
固有値	12.17	2.98	1.87	1.11	0.54	0.43	
寄与率	53.60	12.26	7.13	4.47	1.93	1.60	
累積寄与率	53.60	65.86	72.99	77.46	79.38	80.98	
因子相関行列	F1	F2	F3	F4	F5	F6	
F1		.39	.40	-.56	-.74	-.68	
F2			.24	-.16	-.31	-.73	
F3				-.37	-.03	-.35	
F4					.50	.19	
F5						.55	
F6							

注）*は音楽作品の感情価測定尺度「親和」因子より「いとしい」,「恋しい」の代わりに加えた項目
因子負荷量は.30以上の項目のみ記載

えた上で分析を行った。その結果，因子負荷パターンが谷口（1995）の因子分析結果とおおむね一致する 6 因子が抽出された（累積因子寄与率79.59％）。ただし，一部複数の因子へ同等の負荷量を持つ項目（「断固とした」,「気高い」の 2 項目）が現れたため，この項目を除外して再度因子分析（最尤法・直接オブリミン回転）を行った。その結果 6 因子が抽出され，因子構造が十分に解釈可能なものとなったことから（累積因子寄与率80.98％：Table 2），この結果を適当なものとして採択した。この因子分析におけるKaiser-Meyer-Olkin標本妥当性の測度は.95であり，Bartlettの球面性検定においても帰無仮説が1%水準で棄却されていたため，扱っているサンプルは因子分析に適していると考えられる。抽出された因子は，第 1 因子から順に，軽快さ，陰り，力強さ，柔らかさ，荘重，高揚感を表す因子であると考えられた。また，音楽作品の感情価測定尺度（懐かしさ感情除外）の下位尺度ごとにCronbachの α 係数を算出した結果，いずれの尺度においても $\alpha = .77$以上という値が得られたことから，各尺度の内的整合性は高く，満足のいく水準であることが示された。

1-2. 懐かしさ感情を除外した音楽作品の感情価測定尺度と感情喚起の関連

次に，音楽作品の感情価と音楽を聴取したことによって喚起された感情との関連を検討するために，音楽作品の感情価測定尺度（懐かしさ感情除外）の下位尺度と非活動的快尺度，および活動的快尺度との間でPearsonの積率相関係数を求めた（Table 3）。その結果,「柔らかさ」尺度と非活動的快尺度との間に強い正の相関がみられ（$r = .74$),「高揚感」尺度と活動的快尺度，および「軽快さ」尺度と活動的快尺度との間に強い正の相関がみられた（それぞれ，$r = .89$, $r = .75$）。以上のことから，非活動的快の喚起に影響を与える曲単位の変数としては音楽の感情価のうち「柔らかさ」を用い，活動的快の喚起に影響を与える曲単位の変数としては音楽の感情価のうち「高揚感」および「軽快さ」を用いて後続の分析を行った。

Table 3　音楽作品の感情価測定尺度（懐かしさ除外）と快感情尺度の尺度間相関

	非活動的快	活動的快
高揚感	− .32 **	**.89 ** **
陰り	.30 **	− .70 **
柔らかさ	**.74 ** **	− .31 **
軽快さ	− .54 **	**.75 ** **
力強さ	− .54 **	.70 **
荘重	.49 **	− .60 **

** $p < .01$

1-3. 音楽に対する懐かしさの構成感情の因子分析

続いて，音楽に対する懐かしさの構成感情（嶌田，1997）12項目に，音楽作品の感情価測定尺度（谷口，1995）のうち懐かしさ感情に関連すると考えられた「いとしい」,「恋しい」の 2 項目を加えた，計14項目の評定値について，探索的因子分析（最尤法・直接オブリミン法）を行った。その結果，3 因子が抽出された（Table 4）。累積因子寄与率は59.22%であった。この因子分析におけるKaiser-Meyer-Olkin標本妥当性の測度は .82であり，Bartlettの

球面性検定においても帰無仮説が1%水準で棄却されていたため，扱っているサンプルは因子分析に適していると考えられる。抽出された因子は，第１因子から順に，親しみ，せつなさ，おかしさを表す因子であると考えられた。また，音楽に対する懐かしさの構成感情の下位尺度ごとにCronbachのα係数を算出した結果，おかしさ尺度でα = .66という値が示されたものの，他２つの因子ではα = .81以上という高い値が得られた。尺度全体のα係数もα = .77という高い値が得られた。

Table 4　音楽に対する懐かしさ構成感情の因子分析パターン行列

形容語	因子負荷量			共通性
	F1	F2	F3	
＜第1因子：親しみ＞（α＝.86）				
たのしい	**.87**	-.36		.87
うれしい	**.85**			.75
心がひかれる	**.70**	.36		.68
親しみのある	**.65**			.44
ここちよい	**.61**	.37	-.35	.63
なじみがある	**.55**			.32
＜第2因子：せつなさ＞（α＝.81）				
せつない	-.32	**.79**		.68
いとしい		**.77**		.68
しみじみとした	-.34	**.76**		.69
恋しい		**.66**		.56
ほのぼのとした		**.49**		.31
＜第3因子：おかしさ＞（α＝.66）				
おかしい			**.69**	.68
照れ臭い	.37		**.63**	.59
古くさい			**.58**	.40
固有値	4.36	3.41	1.73	
寄与率	26.94	23.02	9.27	
累積寄与率	26.94	49.95	59.22	
因子相関行列	F1	F2	F3	
F1		.08	.12	
F2			-.07	
F3				

注）因子負荷量は.30以上の項目のみ記載。

2．2段抽出モデルによるマルチレベル分析

2-1．音楽の感情価，懐かしさおよび好みの程度が非活動的快喚起に与える影響の検討

非活動的快（Y）を従属変数とし，音楽作品の感情価のうち「柔らかさ（W）」をレベル２（曲単位）の独立変数とし，懐かしさの構成感情の下位尺度である「親しみ（X1a）」，「せつなさ（X1b）」，「おかしさ（X1c）」と，音楽に対する好み（X2）をレベル１（個人単位）の独立変数とした，２段抽出モデルによるマルチレベル分析を行った。各レベルにおい

て立てたモデル式を以下に示した。レベル１では，喚起される非活動的快の程度を従属変数とし，切片，個人レベルの独立変数とその係数，個人レベルの誤差からなるモデルを立てた。レベル２では，レベル１の切片および係数のそれぞれを従属変数とし，切片，集団レベルの独立変数とその係数，集団レベルの誤差からなるモデルを立てた。なお，レベル１の独立変数に関しては，レベル１の変数とレベル２の変数の両方の影響を検討するために，グループ平均を用いた中心化を行った。分析にはMplus Ver. 6を用いた。本研究における有意水準は5%と設定した。

レベル1：

$$Y_{ij} = \beta_{0j} + \beta_{1aj} \cdot X1a_{ij} + \beta_{1bj} \cdot X1b_{ij} + \beta_{1cj} \cdot X1c_{ij} + \beta_{2j} \cdot X2_{ij} + r_{ij}$$

レベル2：

$$\begin{cases} \beta_{0j} = \gamma_{00} + \gamma_{01} \cdot W_j + u_{0j} \\ \beta_{1aj} = \gamma_{10} + \gamma_{11} \cdot W_j + u_{1j} \\ \beta_{1bj} = \gamma_{20} + \gamma_{21} \cdot W_j + u_{2j} \\ \beta_{1cj} = \gamma_{30} + \gamma_{31} \cdot W_j + u_{3j} \\ \beta_{2j} = \gamma_{40} + \gamma_{41} \cdot W_j + u_{4j} \end{cases}$$

以上のモデルを用いて２段抽出モデルによるマルチレベル分析を行った結果，良好なモデル適合度が得られたことから，このモデルを採用した。Table 5に，曲単位のモデルにおける各変数の推定値および標準誤差と，個人単位のモデルにおける各変数の推定値および標準誤差を示した。得られた推定値および有意水準の値から，第一に，曲単位の独立変数である音楽作品の感情価の「柔らかさ」は，非活動的快感情の喚起に有意な正の影響を与えることが示された（推定値3.73, $p<.01$）。また，第二に，レベル１での各独立変数の推定値より，「柔らかさ」が非活動的快感情の喚起に与える影響を考慮した上でも，懐かしさの構成感情の下位尺度のうち「せつなさ」が非活動的快感情の喚起に有意な正の影響を与えることが示された（推定値2.61, $p<.01$）。また，懐かしさの構成感情の下位尺度のうち「おかしさ」は非活動的快感情の喚起に有意な負の影響を与えることが示された（推定値-1.28, $p<.01$）。一方，懐かしさの構成感情の下位尺度のうちの「親しみ」，および音楽に対する「好み」は，非活動的快感情の喚起に有意な影響を与えないことが示された（それぞれ，推定値 .38, *n.s.*; 推定値-.89, $p<.10$）。

2-2．音楽の感情価，懐かしさおよび好みの程度が活動的快喚起に与える影響の検討

続いて，活動的快（Y）を従属変数とし，音楽作品の感情価のうち「高揚感（W1）」と「軽快さ（W2）」をレベル２（曲単位）の独立変数とし，懐かしさの構成感情の下位尺度である「親しみ（X1a）」,「せつなさ（X1b）」,「おかしさ（X1c）」と，音楽に対する好み（X2）をレベル１（個人単位）の独立変数とした，２段抽出モデルによるマルチレベル分析を行った。この際，レベル２において回帰係数にランダム性を仮定するモデルは適合度が良好な水準には達しなかったため，切片にのみランダム性を仮定するモデルを採用した。各レベルにおいて立てたモデル式を以下に示した。レベル１では，喚起される活動的快の程度を従属変数とし，切片，個人レベルの独立変数とその係数，個人レベルの誤差からなるモデル

Table 5　非活動的快喚起の程度を説明する回帰モデルの推定値

	推定値	*SE*	*p* 値
固定効果			
切片（γ_{00}）	2.92	1.28	＜.05
変量効果			
レベル 2：曲単位（感情価）			
柔らかさ 切片（γ_{01}）	**3.73**	.32	＜.01
傾き			
親しみ（γ_{11}）	-.04	.19	*n.s.*
せつなさ（γ_{21}）	-.01	.24	*n.s.*
おかしさ（γ_{31}）	**.42**	.13	＜.01
好み（γ_{41}）	.03	.11	*n.s.*
レベル 1：個人単位（懐かしさ・好み）			
親しみ（γ_{10}）	.38	.60	*n.s.*
せつなさ（γ_{20}）	**2.61**	.76	＜.01
おかしさ（γ_{30}）	**-1.28**	.41	＜.01
好み（γ_{40}）	-.89	.46	＜.10

を立てた。レベル 2 では，レベル 1 の切片および係数のそれぞれを従属変数とし，切片，集団レベルの独立変数とその係数，集団レベルの誤差，または切片，集団レベルの誤差からなるモデルを立てた。中心化の方法および有意水準は非活動的快に対する分析と同様であった。

レベル1：

$$Y_{ij} = \beta_{0j} + \beta_{1aj} \cdot X1a_{ij} + \beta_{1bj} \cdot X1b_{ij} + \beta_{1cj} \cdot X1c_{ij} + \beta_{2j} \cdot X2_{ij} + r_{ij}$$

レベル2：

$$\begin{cases} \beta_{0j} = \gamma_{00} + \gamma_{01} \cdot W1_j + \gamma_{02} \cdot W2_j + u_{0j} \\ \beta_{1aj} = \gamma_{10} + u_{1j} \\ \beta_{1bj} = \gamma_{20} + u_{2j} \\ \beta_{1cj} = \gamma_{30} + u_{3j} \\ \beta_{2j} = \gamma_{40} + u_{4j} \end{cases}$$

以上のモデルを用いて 2 段抽出モデルによるマルチレベル分析を行った結果，良好なモデル適合度が得られたことから，このモデルを採用した。Table 6に，曲単位のモデルにおける各変数の推定値および標準誤差と，個人単位のモデルにおける各変数の推定値および標準誤差を示した。得られた推定値および有意水準の値から，第一に，曲単位の独立変数である音楽作品の感情価の「高揚感」および「軽快さ」は，活動的快感情の喚起に有意な正の影響を与えることが示された（それぞれ，推定値 .73, .34，いずれもp＜.01）。また，第二に，レベル 1 での各独立変数の推定値より，「高揚感」および「軽快さ」が活動的快感情の喚起に

与える影響を考慮した上でも，懐かしさの構成感情の下位尺度のうち「親しみ」および「おかしさ」が活動的快感情の喚起に有意な正の影響を与えることが示された（それぞれ，推定値 .55, 08，いずれもp<.01）。また，懐かしさの構成感情の下位尺度のうち「せつなさ」は活動的快感情の喚起に有意な負の影響を与えることが示された（推定値-.16, p<.01)。一方，音楽に対する「好み」は，活動的快感情の喚起に有意な影響を与えないことが示された（推定値 .06, *n.s.*)。

Table 6　活動的快喚起の程度を説明する回帰モデルの推定値

	推定値	*SE*	*p* 値
固定効果			
切片（γ_{00}）	-.33	.11	＜.01
変量効果			
レベル 2：曲単位（感情価）			
高揚感 切片（γ_{01}）	**.73**	.07	＜.01
軽快さ 切片（γ_{02}）	**.34**	.07	＜.01
レベル 1：個人単位（懐かしさ・好み）			
親しみ（γ_{10}）	**.55**	.06	＜.01
せつなさ（γ_{20}）	**-.16**	.05	＜.01
おかしさ（γ_{30}）	**.08**	.03	＜.01
好み（γ_{40}）	.06	.10	*n.s.*

Ⅳ　考察

本研究では，音楽の感情価と，音楽に対する懐かしさ感情および好みが，感情喚起に対して異なるレベルで作用することを前提とした上で，1）音楽の感情価測定尺度（谷口，1995）の下位尺度の「親和」から懐かしさ感情に関連する項目を除外して因子構造を再検討すること，2）音楽に対する懐かしさの構成感情（嶌田，1997）の項目をベースに，懐かしさを多面的に捉える尺度を作成すること，3）作成した尺度を用い，2段抽出モデルによるマルチレベル分析を行うことにより，集団レベルの要因である，曲の感情価の影響を考慮した上で，個人レベルの要因である，音楽に対する懐かしさの多面的側面と音楽に対する好みが，ポジティブ感情喚起に及ぼす影響を検討すること，以上3点を目的として調査を行った。その結果，第一として，先行研究と同様の因子構造を持ち，かつ音楽に対する懐かしさ感情を測定する尺度とは独立した項目を持つ，音楽の感情価測定尺度を得た。また，第二の結果として，「親しみ」,「せつなさ」,「おかしさ」という3つの因子を持つ，懐かしさ感情を多面的に捉える尺度を得た。更に，第三の結果して，以上のように得られた各尺度を用いて，喚起されたポジティブ感情の程度を従属変数とした2段抽出モデルによるマルチレベル分析を行った結果，音楽の感情価が感情喚起に及ぼす効果を考慮した上でもなお，音楽に対する懐かしさ感情のうち，「せつなさ」という側面が非活動的快感情の喚起に，そして「親しみ」および「おかしさ」という側面が活動的快感情の喚起に有意な正の影響を与えることが示された。以下，まず得られた尺度についての考察を行い，続いて快感情喚起についての

考察を行う。

1．音楽評価尺度の因子分析

音楽作品の感情価測定尺度（谷口，1995）24項目から，懐かしさ感情に関連する「いとしい」,「恋しい」という 2 項目を除いた代わりに，同じ「親和」因子から「優しい」,「繊細な」という 2 項目を加え探索的因子分析を行った結果，それぞれ，高揚感，陰り，柔らかさ，力強さ，軽快さ，荘重を意味する 6 因子から構成される音楽の印象評定尺度が得られた。また，各尺度はいずれの尺度においても高い内的整合性を有していることが確認された。こうして，谷口（1995）と同様の因子構造を持ち，かつ音楽に対する懐かしさ感情を測定する尺度とは独立した項目を持つ，音楽の感情価を測定する尺度を得た。

また，音楽に対する懐かしさの構成感情（嶌田，1997）12項目に，音楽作品の感情価測定尺度（谷口，1995）のうち懐かしさ感情に関連すると考えられた「いとしい」,「恋しい」の 2 項目を加えた計14項目の評定値について探索的因子分析を行ったところ,「親しみ」,「せつなさ」,「おかしさ」の 3 因子が得られた。嶌田（1997）は懐かしさの構成感情として「親しみ」,「やさしさ」,「せつなさ」,「おかしさ」,「新鮮さ」の 5 主成分が得られたとする一方で，その解釈としては，辞書的定義を反映した快感情を含む「親しみ」，自伝的記憶を反映している「せつなさ」と「やさしさ」，時間的な空白感を反映している「おかしさ」，というように 3 側面からの解釈を行っていた。本研究の因子分析の結果抽出された 3 因子は，嶌田（1997）が行った 3 側面での解釈の記述に合致するものであったため，因子分析結果を解釈可能なものとして採択した。また，3 項目からなる「おかしさ」尺度での α 係数が多少低い値となったものの，音楽に対する懐かしさの構成感情はおおむね高い内的整合性を有していることが確認された。更に，下位尺度間の因子相関行列はいずれも低い値となったことから，音楽に対する懐かしさの構成感情の下位尺度はお互いにある程度独立していることが示された。

懐かしさ感情（nostalgia）について，Sedikides, Wildschut, Arndt, & Routledge（2008）は，ノスタルジアは主としてポジティブな調子を帯びた感情であり，幸せと悲しみを同時に表すものであるが，悲しみに比べ幸せをより多く表すこと，そしてその上でほろ苦さも含んでいることを述べている。また，Kusumi, Matsuda, & Sugimori（2010）は，懐かしさを引き起こすノスタルジア広告の効果に関する研究において，懐かしさを感じる光景，歌，出来事，CMについて思い出すことの自由記述の分析から懐かしさが何によって引き起こされるのかについての検討を行い，結果として，懐かしさは，過去に頻繁に経験したこととその経験からの長い空白時間によって引き起こされることを示した。本研究で採択した懐かしさの構成感情の因子構のうち「親しみ」は，Sedikides et al.（2008）における「ポジティブな調子を帯びた感情」という記述と，Kusumi et al.（2010）における「過去に頻繁に経験したことによって引き起こされる」という記述に関連した因子であり,「せつなさ」はSedikides et al.（2008）の述べる「ほろ苦さ」に関連した因子,「おかしさ」はKusumi et al.（2010）における「経験からの長い空白時間によって引き起こされる」という記述に関連した因子であると考えられた。

2．音楽の感情価，懐かしさおよび好みの程度が快感情喚起に与える影響の検討

2段抽出モデルを採用したマルチレベルによるモデル分析の結果から，曲レベルの「柔らかさ」という感情価が非活動的快感情の喚起に有意な正の影響を与えることと，「高揚感」および「軽快さ」が活動的快感情の喚起に有意な正の影響を与えることが示された。これらは谷口（1995）による相関分析の結果と一致するものであった。更に，曲レベルの変数である感情価が快感情の喚起に与える影響を考慮した上でも，個人レベルの，音楽に対する懐かしさ感情のうち「せつなさ」という側面が，非活動的快感情の喚起に有意な正の影響を与えることと，「おかしさ」という側面が有意な負の影響を与えることが示された。また，懐かしさ構成感情のうち「親しみ」という側面，および音楽に対する好みは，非活動的快感情の喚起に有意な影響を与えないことが示された。一方で活動的快を従属変数とすると，「せつなさ」が負の影響を与え，「親しみ」と「おかしさ」が正の影響を与えることが示された。先行研究においてポジティブ感情の喚起との関連が検討されてきたのは，懐かしさを「懐かしい」という単一の項目で捉えたものであり，懐かしさとポジティブ感情喚起の関連が示されてきたものの，複雑な懐かしさ感情のうちどの側面がポジティブ感情の喚起に関連するかについては明らかとされてこなかった。こうした先行研究の結果に対し，本研究では懐かしさを構成する感情を多面的に捉える尺度を用いて各側面の影響を検討することによって，ポジティブ感情とネガティブ感情が混合する複雑な懐かしさ感情のうち，どの側面がポジティブ感情喚起に影響するのかについて新しい知見を得ることを可能とした。特に，「せつなさ」は一見ネガティブな感情であると捉えられるものであるため，「せつなさ」が低覚醒のポジティブ感情を喚起させることに関連しているという結果は興味深い。せつなさは単純なネガティブ感情ではなく，「ほろ苦さ」に関連するような，認知的判断が混ざったネガティブ感情である（Sedikides et al., 2008）ことが低覚醒のポジティブ感情との関連を生じさせた原因であると考える。せつなさは過去に接触した特定の対象に関係するような，個人にとって重要な意味を持つ自伝的記憶と結びついていることが推測される。せつなさは，こうした個人にとっての大切な思い出の存在を反映して生じる感情であり，更にそれに加え，もうもとには戻れない，という喪失感を持って経験される感情である（Holak, & Havlena, 1998）。喪失感という一種のネガティブ感情の存在は，一方で個人にとっての大切な思い出の価値をより際立たせるものであり，自分が歩んできた人生を肯定的にみる視点は心理的健康を保つ上で重要な役割を果たす（Sedikides et al., 2008）とされることから，せつなさが低覚醒のポジティブ感情を喚起させる要因となったと考えられる。

また，本研究の結果から，低覚醒のポジティブ感情と高覚醒のポジティブ感情の間で，喚起の程度に影響を与える懐かしさ感情の側面が異なることも示された。音楽を用いてポジティブ感情を喚起させることを目指す介入を行う際には，気分を落ち着けることを目的とするか，沈んだ気分を活性化することを目的とするか，介入を行う目的を明確に定めた上で用いる音楽の種類を選定することによって，介入の効果をより高めることが可能となることが示された。しかしその一方で，ただ単に懐かしい音楽を用いれば望ましい効果が得られる，との考えを持って音楽を用いた場合，目指した効果に対して逆の効果を生む可能性が示された。

3．今後の展望

より有効性の高い音楽療法を目指すにあたっては，ただ音楽を使えばいい，というものではなく，個人の好みおよび個人が懐かしいと思う音楽に関してアセスメントを行い，個人に合った音楽療法を展開していくという，テーラーメイド音楽療法の考え方が重要視されている（Gerdner，2010）。戦前生まれの人々に関して言えば，メディアの少なさの影響もあり，触れてきた音楽にある程度の共通性があるとされるが，戦後以降に生まれた人々が音楽療法の主な対象となってくるにあたり，今後ますます音楽療法対象者の触れてきた音楽の幅が広がってくることが必至である。音楽自体に帰属する音楽の感情価に比べ，音楽に対する懐かしさは，感じる程度が個人によって大きく異なるために，「これから」の音楽療法を考えていくにあたり，音楽の感情価の影響を考慮しつつ，音楽療法で用いる音楽に対する「懐かしさ」という個人の反応が喚起される感情に与える影響について検討するという視点は有用であったと考える。

しかし，「懐かしさ」という概念に関する研究は，日本国内において十分に行われているとは言い難く，海外におけるNostalgia研究という文脈に依る処となっている。だがその際にも，海外で言われる“nostalgiaと，日本で言うところの「懐かしさ」が完全には一致しないことを考える必要がある。今後は，Nostalgia研究において関連要因として検討されてきた，懐かしさに伴って想起される記憶や共に生起する感情の影響も含め，日本における文脈から「懐かしさ」について慎重に検討していくことが望まれる。また，ノスタルジア体験に寄与する変数として，個人のノスタルジア傾向の持つ効果について言及がなされていること（Janata, Barrett, Grimm, & Robins, 2010），およびノスタルジア傾向の測定尺度に関する研究から，音楽に対するNostalgiaは年齢とともに増加するという結果が示されていること（Bacho，1995）から，音楽に対する懐かしさがポジティブ感情喚起に影響するという本研究の知見を更に発展させるために，今後，個人のノスタルジア傾向や年齢との関連を考慮に入れた上で更なる詳細な検討を行っていくという可能性が考えられた。

引用文献

Bacho, K. I.（1995）. Nostalgia: A psychological perspective, *Perceptual and Motor Skills,* **80**, 131-143.

蒲生紀子（2005）． 歌に守られた痴呆性入居者の旅立ち　環境調整と「体験型統合」　心理臨床学研究，**23**，86-97.

Gerdner, L. A.（2010）Individualized music for elders with dementia, *Journal of gerontological nursing*, **36**(6), 7-15.

Hepper, E. G., Ritchie, T. D., Sedikides, C., & Wildschut, T.（2012）. Odyssey's end: Lay conceptions of nostalgia reflect its original Homeric meaning. *Emotion*, **12**, 102-119.

Holak, S. L., & Havlena, W. J.（1998）. Feelings, fantasies, and memories. *Journal of Business Research*, **42**, 217-226.

岩永　誠（1999）． 音楽の特徴と好みが感情に及ぼす影響　日本バイオミュージック学会誌，**17**，104-109.

Janata, P., Barrett, F. S., Grimm, K. J., & Robins, R. W.（2010）. Music-evoked nostalgia: Affect, memory, and personality, *Emotion*, **10**, 390-403.

Juslin, P. N., & Västfjäll, D. (2008). Emotional responses to music: The need to consider underlying mechanisms, *Behavioral and Brain Sciences*, **31**, 559-621.

小林麻美・岩永　誠・生和秀敏（2002）．音楽の「懐かしさ」と感情反応・自伝的記憶の想起との関連　広島大学総合科学部紀要Ⅳ理系編，**28**，21-28.

Kusumi, T., Matsuda, K., & Sugimori, E. (2010). The effects of aging on nostalgia in consumers' advertisement processing, *Japanese Psychological Research*, **52**, 150-162.

町田佳世子（2010）．ポジティブ感情の喚起要因と機能に関する研究の現状と展望，札幌市立大学研究論文集，**4**，27-31.

内藤正智（2006）．音楽聴取後の感情変化についての研究―テンポとメロディと曲に対する好みが感情尺度と癒し感情に与える影響―　日本大学大学院総合社会情報研究科紀要，No. 7，441-450.

中村　均（1983）．音楽の情動的性格の評定と音楽によって生じる情動の評定の関係　心理学研究，**54**，54-57.

貫　行子・星野悦子（2002）．音楽療法　研究と論文のまとめ方　資格取得をめざす人のために　音楽之友社

小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人（2000）．一般感情尺度の作成　心理学研究，**71**，241-246.

佐藤　徳・安田朝子（2001）．日本語版PANASの作成　性格心理学研究，**9**(2)，138-139.

澤亜矢子・細見由加里・寺西徳子・金田麻里・神子澤梨香・佐竹明子・塚原節子（2009）．せん妄患者への音楽療法の有用性　成人看護Ⅱ，**40**，75-77.

Sedikides, C., Wildschut, T., Arndt, J., & Routledge, C. (2008). Nostalgia: Past, present, and future, *Psychological Science*, **17**, 304-307.

嶌田久美（1997）．音楽に対するなつかしさの構成感情について　日本教育心理学会総会発表論文集，No. 39，374.

Takigawa, S. (2010). The role of nostalgic feeling on recall of autobiographical memory, *Unpublished doctoralthesis*, Hokkaido University, Sapporo, Japan.

谷口高士（1995）．音楽作品の感情価測定尺度の作成および多面的感情状態尺度との関連の検討　心理学研究，**65**，463-470.

寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一（1991）．多面的感情状態尺度・短縮版の作成　日本心理学会第55回大会発表論文集，435.

寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人（1992）．多面的感情状態尺度の作成　心理学研究，**62**，350-356.

上野眞也（2011）．ソーシャルキャピタルにおけるコミュニティ効果　熊本大学政策研究，**2**，23-32.

渡辺恭子（2000）．痴呆症状を呈する老年期の患者に対する音楽療法の試み　日本芸術療法学会誌，**30**(2)，66-73.

Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge, C. (2006). Nostalgia: Content, Triggers, Functions, *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 975-993.

山口　智・赤沼恭子・佐藤正之・目黒謙一（2010）．慢性期重度失語の血管性認知症患者に対する音楽療法の試みⅡ　老年精神医学雑誌，**21**，119.